

大洲藩 加藤家の治世

明治時代に取り壊された大洲城天守閣が、2004(平成16)年に、当時の姿のままに復元されました。天守閣からは、大きく蛇行する肱川が見え、肱川橋の向こうに美しい姿の富士山が迫っています。さて、ここからは、江戸時代にこの地を治めた加藤家の、大洲城を中心とした町づくりを見ていくことにします。

中江藤樹も
加藤家にゆかりの
ある人物なの？

ぼく知ってたよ！

中江藤樹の像 (大洲市城山)

1 事業

(1) 初代藩主 加藤貞泰 (1580~1623)

大洲における加藤家最初の殿様は加藤貞泰です。美濃国黒野（現在の岐阜県）の城主だった貞泰は、関ヶ原の戦いで徳川家康に通じ、最終的に東軍（徳川方）に加わった功により、伯耆国（現在の鳥取県）米子6万石を与えられました。それに続く大坂の陣でも功績をあげ、1617年に大洲へ国替えとなりました。米子も大洲もともに6万石でしたが、山陰から瀬戸内側への国替えは栄転だったようです。



加藤家の家紋（曹溪院蔵）



加藤貞泰（曹溪院蔵）

領内を治めるにあたって、前領主の脇坂安治は兵農分離を円滑に進めるとともに、年貢を収納できるようにするため、有力な地侍を庄屋に任命しましたが、貞泰もその庄屋体制を引き継ぎました。また、瀬戸内海を行き来するために船が必要になったので、**船手組制度**を整備したり船舶の建造に力を入れたりするなど、精力的に藩の基礎を作っていました。

また、貞泰は詩や和歌、連歌に親しむ一方で、八条流馬術の秘伝を受けると、文武両道を実践する多才な人

国替えの理由

黒野から米子へ国替えされた理由については、長良川の洪水防止のために貞泰が築いた堤防が、隣の加納藩（奥平氏）のものより高かったため、奥平の妻である亀姫（徳川家康の長女）が立腹し、家康に頼んで国替えさせたとも言われています。

船舶の建造と

船手組制度

貞泰は、市橋重長を長浜船奉行に任命して、船舶の建造を急がせました。1618年に数隻が完成した際には、貞泰が大いに喜んだと伝えられています。また、水軍及び船に関わる役人たちを船手組と言いました。

大洲藩の基礎を作った人なんだ。



物でもありません。

ところが、跡目相続に伴って、御家騒動が起きました。この騒動には、貞泰の遺言やその妻である法眼院の主張により、大洲藩6万石を、長男泰興と二男直泰が3万石ずつ分けるという案が浮上し、この案に家老であった大橋作右衛門が強硬に反対したという説があります。結局、この騒動は、加藤家親族の仲裁により、弟の直泰に1万石を与えることで決着しました。その結果、1万石の大名となった直泰は新谷藩を興しました。また、大洲藩を継いだ兄の泰興は、実質5万石となりましたが、格式は6万石のままでした。こうして騒動は一件落着きました。御家騒動が起こると藩が取りつぶしになることが多かった当時、このような**円満な決着は珍しいもの**でした。



加藤直泰の馬乗大将図
(法眼寺蔵／
愛媛県歴史文化博物館保管)

(2) 2代藩主 加藤泰興 (1611~1678)

加藤泰興は槍術の達人で、加藤家伝流槍術の開祖となりました。家臣団の編成や軍備の強化に力を注ぐとともに、大阪城(当時は大坂城)や江戸城の改修、仙洞御所の普請、さらには蒲生家(松山)、生駒家(高松)、山崎家(丸亀)が取りつぶしになったとき、次の藩主が入城するまで城を管理する在番を務めるなど、多忙を極めていました。

そのような日々を送る中、泰興は、様々な分野で才能がある者を引き立て、ためらわず重要な仕事を任せました。さらに、他藩から解雇された大名の家来なども多く召し抱えています。また、**藩の学問にも力を入れ**、中江藤樹が藩を離れた後も、中川謙叔や小川寛、大野了佐

新谷藩陣屋跡

一般に3万石以下の城をもたない大名の藩庁を陣屋と言います。現在も、新谷小学校の敷地内に陣屋跡が残されています。



鳳麟閣

様々な負担

幕府が大名に命じて行わせる土木工事を「お手伝い普請」と言いました。経費や作業する人員の確保は、すべて大名の負担でした。また、国替えや没収などで領主が不在となったとき、幕府の命令で城の守衛に当たることを在番と言います。泰興は何度もこの在番を命じられました。



加藤泰興（曹溪院藏）

(3) 領内の様子

大洲城大手門前の枳形通りと、その通りを肱川へ抜けた城山下の河港が城下町の表玄関でした。この港は、肱川流域における最大の港としてにぎわいました。枳形通りから東の本町、中町、裏町（末広町）までが整然とした古い町屋で、塩屋（志保）町と上（東）横丁付近には商人が多く住んでいました。中村（肱川の北側）との行き来はすべて渡し舟でした。ところで、泰興の時代に願い出た大洲城の石垣修理を許可した幕府の公式文書に、初めて「大洲」という表記が出ています。このことから、現在の大洲という地名はこの頃から使われていたと考えられます。



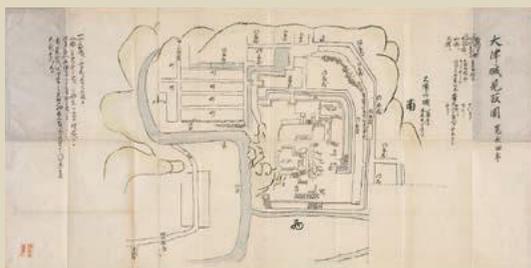
大洲城下町割図（大洲市立博物館蔵）



たちが、近江国（今の滋賀県）に住んでいた藤樹の下に学びに行くことを認めたり、盤珪を大洲に迎えたりして、学問をいっそう広めることに努めました。晩年はその地位を孫に譲り、自身は「月窓」という名前で隠居しました。

大洲城 隠密が探った

武家諸法度により、城を修理するには、絵図を添えて願い出て、幕府の認可を待たなければなりません。また、幕府は隠密を派遣して各藩を偵察させました。



大津の城・隠密図（伊予史談会蔵）

大洲藩って
ずいぶんと
広い地域
だったんだね。



さて、当時の大洲藩の領地は、今の大洲市よりもずいぶんと広く、現在の内子町や伊予市、砥部町も含みました。また、風早と呼ばれた松山市北条周辺も領地だったのですが、飛び地で不便だったため、松山藩と替え地（領地の交換）を行い、整理統合しました。この替え地は、1万3000石あまりの土地を交換する大がかりなものでしたが、家老大橋作右衛門の働きにより実現しました。また、新谷藩の領地は、大洲藩の領地の中に飛び地となっていました。

（4）江戸時代の治水

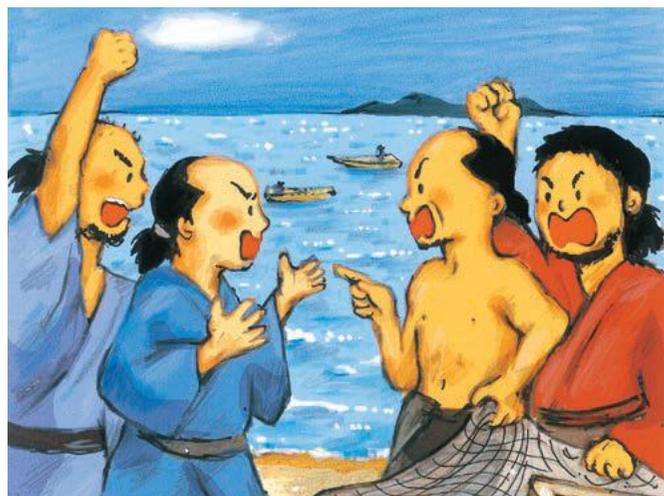
2代藩主泰興は、優れた土木技術をもつ反田八郎兵衛に命じて、常に水番2人に水位を観測させたほか、**石積み**の「ナゲ」を築かせ、洪水に備えました。

ナゲは、菅田から長浜の間に10か所ありました。10cm以下の小さな石と粘土を固めて、その表面を多角形の割石で保護して、水勢を変えて堤防を保護するものです。そのうち、大洲城に近い渡場ナゲは、岩盤を芯として作られていて、長さが40mあり、城山下へ深い淵をつくって城の守りを堅くすることや、河港の水深を確保することを目的に築かれました。

また、度重なる洪水に備え、八郎兵衛は柚木の肱川左岸に**御用藪**を作ろうと、川に近いところから、ホテイチク（布袋竹）、マダケ（真竹）、さらにエノキ（榎）を混ぜて植えました。エノキは粘りが強く、しっかりと根を張るので、護岸を固めて洪水時に堤防が壊れるのを防ぐ効果があります。また、流木やゴミを止めるフィルターとしての働きもしました。この御用藪は、現在も柚木の県道沿いに「エノキの樹叢」として残っていて、市の天然記念物として大切にされています。若宮の肱川右岸にも御用藪が残っていますが、こちらは土居武藏という人物が作りしました。

替え地による紛争

松山藩との替え地は、漁場の権利や薪を取る権利を巡る紛争につながりました。1658年には、松前漁民との大乱闘事件が起き、土佐藩主が調停に乗り出してようやく解決しました。





柚木のエノキの樹叢 2016(平成28)年2月



渡場ナゲ 2016(平成28)年2月

江戸期の主な洪水(2丈4尺5寸以上の出水)

西暦	和号	月日	洪水の状況
1702	元禄15	7月28日	洪水 濃家1332軒
1702	元禄15	8月20日	洪水2丈5尺 (7.58m)
1703	元禄16	8月19日	暴風・洪水 倒家608軒
1707	宝永4	8月18日	洪水 濃家1782軒
1721	享保6	閏7月6日	洪水2丈9尺7寸 (9.00m)
1721	享保6	閏7月15日	洪水2丈9尺5寸 (8.94m)
1773	安永2	5月25日	洪水2丈5尺 (7.58m)
1783	天明3	8月12日	洪水2丈8尺 (8.48m)
1787	天明7	4月25日	洪水2丈9尺7寸 (9.00m)
1788	天明8	4月25日	洪水2丈7尺9寸 (8.45m)
1789	寛政元	7月25日	洪水2丈7尺5寸 (8.33m)
1794	寛政6	8月11日	洪水2丈8尺2寸 (8.55m)
1804	文化元	7月26日	洪水2丈6尺2寸 (7.94m)

西暦	和号	月日	洪水の状況
1804	文化元	8月26日	洪水2丈9尺5寸 (8.94m)
1816	文化13	8月23日	洪水2丈4尺5寸 (7.42m)
1821	文政4	8月8日	洪水2丈5尺 (7.58m)
1822	文政5	6月22日	洪水2丈7尺5寸 (8.33m)
1826	文政9	5月21日	洪水3丈3尺1寸 (10.03m)
1827	文政10	6月17日	洪水2丈5尺 (7.58m)
1829	文政12	5月24日	洪水2丈4尺6寸 (7.45m)
1831	天保2	6月3日	洪水2丈8尺6寸 (8.67m)
1832	天保3	6月9日	洪水2丈6尺6寸 (8.06m)
1838	天保9	7月22日	洪水2丈7尺3寸 (8.27m)
1846	弘化3	7月9日	洪水2丈6尺 (7.88m)
1852	嘉永5	8月16日	洪水2丈6尺 (7.88m)
1855	安政2	7月14日	洪水2丈7尺5寸 (8.33m)
1886	明治19	9月10日	洪水3丈2尺4寸 (9.82m)

洪水に備える工夫

1831年に城下を水害から守るために川幅を広げようとし、慶雲寺の山角を切り除く工事を行ったことが「加藤家年譜」に記されています。また、幕末には、如法寺観音堂下から三笠山ヘトンネルを掘って田口へ脇川の水を通じる工事(実際には行われなかった)の設計図が作られました。この設計図は五郎の城願寺に保存されています。

藩政時代の洪水の記録がこれだけ残っていることは大変珍しく、しかも、検証の結果、計測位置(計岩)も明確で、数値も正確とされ、学術的価値が高いと言われています。

植林の工夫

菅田や柚木、若宮、五郎には竹藪(ホテイチク・マダケ)の中にエノキの並木の堤防があり、多田と八多喜には竹藪(マダケ)の堤防が続いています。また、改修前の矢落川や久米川、高富川の堤防にも竹藪が続いていましたが、ここにはマダケを植えて、近くの田畑が日陰にならないよう配慮されていました。

2 学問

1600年に関ヶ原の戦いが起こり、徳川家康が実権を握りました。1603年、家康は征夷大将軍となり、江戸に幕府を開きます。1614年には大坂冬の陣、翌年には大坂夏の陣が起こり、豊臣家は滅びました。戦乱の世は終わり、人々は落ち着いて仕事に励み、平和な暮らしができるようになりました。それに併せて、幕府は儒学を奨励するようになりました。ここ大洲藩でも、中江藤樹をはじめとして、学問が盛んになり、多くの儒学者が後世に名を残しました。また、仏教を通しての教えも人々に広がっていったのです。それでは、大洲の地で儒学や仏教の教えに大きな影響を与えた人物について見ていきましょう。



中江藤樹肖像画（大洲市立博物館蔵）

陽明学とは

陽明学とは、16世紀のはじめに、中国の王陽明が提唱した儒学の一派のことを言います。それまで、儒学の中心は朱子学で知識を重んじる風潮であったのに対して、陽明学は、行動を重んじました。陽明学は、後に日本に伝わり、日本陽明学として発展していきました。

大洲藩ゆかりの偉大な学者です。

ぼくには難しすぎるよー。



(1) 日本陽明学の祖 中江藤樹 (1608~1648)

中江藤樹は、江戸時代初期の儒学者で、「日本陽明学の祖」と言われています。藤樹は、

1608年、近江国高島郡小川村（現在の滋賀県高島市安曇川町上小川）に、農業を営む中江吉次の長男として生まれました。名は「原」と言いますが、与右衛門と呼ばれていました。与右衛門は小さい頃からと

ても元気がよく、周りの子どもたちと野原や小川でよく遊びました。また、両親の仕事もよく手伝い、しっかり者だったので、祖父吉長にその才能を見込まれて、9歳のときに養子になりました。吉長は米子藩（現在の鳥取県米子市）の藩主である加藤家に仕えていたので、与右衛門は、祖父と一緒に米子で生活することになります。以後、祖父は、与右衛門を文武とも優れた武士にするために、武道だけでなく、勉学にも励ませました。

与右衛門が10歳のとき、加藤家は米子から大洲へ国替えとなり、それに合わせて、祖父とともに大洲に移ります。その冬から、祖父が風早郡（現松山市北条）の奉行となります。祖父は、与右衛門に、中国の書物である「大学」などの多くの書物を買って与えました。「大学」の中に、「天子より以て庶人に至るまで、壹是に皆身を修むるを以て本となす」という言葉があります。これは、「人として生まれたものは、誰でも自分の行いを正しくすることが根本である。それができてこそ、人間らしい人間と言える。」という意味です。与右衛門はこれを読んで大変感動し、「これからしっかり学び、立派な人間になろう。」と決心しました。

3年間、風早郡で過ごした後、与右衛門は13歳のときに大洲に戻りました。この頃から、屋



藤樹少年像 (大洲小学校)

至徳堂の見どころ キエック

まず目を引くのは、楠の木を彫って製作したという中江藤樹先生の木像。その上に飾られた額には、「致良知」とあり、これは滋賀県の「藤樹書院」と同じものです。また、毎年春の訪れとともに、庭には1907（明治40）年、近江の藤樹書院から根分けして移植した「遺愛の藤」が美しい花をつけます。学校の100周年に建てられた記念館では、藤樹先生の肖像画や家族や義理の弟に宛てた書状など、大洲の歴史に関する資料を展示しています。入場は無料で、事前に連絡しておけば、学校に支障がない限り自由に見学ができるので、至徳堂と併せて鑑賞してみましょ。



至徳堂にある中江の水

敷の近くにある曹溪院そうけいいんの天梁和尚てんりやうおしょうについて文字の稽古けいこに励み、詩を作ることなど多くのことを学びました。そして、元服後は祖父と離れて、鉄砲町（現大洲高校内の「至徳堂しとくどう」のあるところ。裏には藤樹が使っていたと言われる「中江の水」という井戸が残されています。）に住むことになりました。城で仕事をした後には武芸の稽古けいこに励み、夕食後は深夜まで独学をしていました。

17歳のときに、本格的に学問にふれる機会がやってきました。大洲の医者いしゃの招きで、京都の僧が「論語」を指導に來たのです。それまで独学

で学びを深めてきた与右衛門にとってはまたとない機会です、その講義に参加しました。これをきっかけとして、「四書大全ししよたいぜん」という書物を購入し、いっそう学問に打ち込んだのです。

さて、与右衛門が22歳の春のことです。与右衛門は、母親を大洲に迎えようと考え、殿様から休みをいただいて近江の小川村に帰ります。与右衛門は、母親と一緒に大洲に移り住むよう強く願いました。しかし、母親は与右衛門の説得に応じず、与右衛門一人で大洲に帰ることになるので、母親に対する与右衛門の思いは強くなるばかりでした。

そして、1634年、27歳のとき、与右衛門はやむなく大洲藩を脱藩し、小川村へ帰ります。当時、脱藩は大きな罪でした。しかし、与右衛門にとっては、たった一人の母親を置いて、大洲にとどまることはできませんでした。**このことこそ、自身の説く「孝行こうこう」の現れ**だったのでしよう。その後、与右衛門は、酒屋を営みながら、村人たちに学問を教えました。家の庭には大きな藤の木があり、それをとても大切にしていたことから、いつしか親しみを込めて「藤樹先生」と呼ばれるようになりました。藤樹のもとには、大洲藩からも多くの藩士たちが向いて勉強に励むようになりました。その中には、苦労を重ねて立派な医師になった大野了佐おののりょうさが



曹溪院（大洲市大洲西山根）



藤樹書院（滋賀県高島市）



中江藤樹の木像（至徳堂）



至徳堂（大洲高校内）

います。また、藤樹の門人の中で、特に名高い人として、熊沢蕃山くまざわばんざんと淵岡山ふちこうざんがいます。蕃山は政治で活躍し、岡山は藤樹の良知の学を教えることに一生を捧げました。

こうして、自分を頼って集まってきた多くの門弟や村人たちに、藤樹はぜんそくに苦しみながらも学問を熱心に教え、多くの人々に多大な影響を与えました。しかし、1648年、41歳の若さで惜しまれながらこの世を去りました。

近江の藤樹のもとへ学びに行く大野了佐おののりょうさ (1612~1688)

大野了佐は、ものを覚えたり理解したりすることが生まれつき苦手でした。そこで、将来は武士にはなれないと考え、医者になることを決意し、藤樹を訪ねてきました。

実際教えてみると、朝10時から夕方4時ごろまで、二、三の言葉を二百回程度繰り返し返して読んで、やっと覚えられるのです。ところが、夕食後にはもう忘れてしまうので、また何度も繰り返し返してようやく覚えたといいいます。

藤樹が脱藩した後、了佐は藤樹を追い、小川村まで教えを請いに行きました。

了佐は、ものを覚えることは苦手でしたが、一度立てた志は、どこまでも貫こうとする粘り強さをもっていました。しかし、了佐が理解できる医学の本がないため、藤樹は多くの医学書をもとにして、了佐のためだけに「捷徑医筌しやくけいいせん」という本を書きました。その本を使って3年かけて学び終えた了佐は、藤樹の前にひれ伏して、涙ながらに感謝しました。

了佐が大洲に戻った後、藤樹は門人に、「いくら私が熱心に教えても、了佐に頑張る気持ちが必要ならば一人前の医者にはなれなかった。お前たちは素晴らしい才能をもっている。やる気があればどんなことでもできる。」と諭しました。

大洲に帰った了佐は、76歳で亡くなるまで、心温かな医者として人々に慕われながら仕事を全うしました。

母を思いやる藤樹

母親を思いやる藤樹について、後に次のような話も語られるようになりました。

藤樹が祖父母と暮らし始めて間もない冬、母親があかぎれに悩まされていると聞いた藤樹は薬を買い、母親のもとへ届けに行きました。藤樹の母親も、本当は涙が出るほど嬉しかったことでしょう。しかし、母親は心を鬼にして、「一度、立派な武士になるために親元を離れる決意をした身である以上、簡単に母のところに戻ってはいけません。」と藤樹を家にも入れず追い返しました。藤樹にとっては少しかわいそうな気もしますが、藤樹が少年の頃から親孝行であった一面がうかがえる話です。

小さい頃から親孝行だったんだね。



藤樹の教え

「致良知」

人は、誰でも、自らを正しく導く、心の本体「良知」を生まれながらに備えています。この心の本体「良知」を備えている人間は、特に学ばなくても、是非善悪を知ることができるし（知）、誰とでも仲良く親しみ合ったり（情）、自ら行動したり（意）することができるのです。

しかし、この「良知」は、鏡のようなもので、いつも手入れして磨いていなくては、様々な欲望によって曇ってしまうのです。私たちは、欲望に打ち勝って「良知」を鏡のように磨き、「良知」に従い、行いを正しくするよう努力することが大切です。

このことを藤樹は「致良知」と言い、「良知に致る」と言っています。

「孝行」

「孝行」とは、父母を大切にし、先祖を尊び、大自然を敬うことです。「孝行」するためには、「良知」を磨き、体を健やかにし、行いを正しくし、家族や周りの人と仲良く親しみ合うことが大切です。

私たちの心や体は、父母から授かったものであり、父母の心や体は、先祖から受け継がれたものです。それはもともと、大自然から授かったものだからです。

さらに、子どもを温かい心でしっかりと育てることも「孝行」です。

「五事を正す」

五事とは、「貌・言・視・聴・思」を言い、それを正すとは、「和やかな顔つきをし、思いやりのある言葉で話しかけ、澄んだ目で物事を見つめ、耳を傾けて人の話を聴き、真心を込めて相手のことを思う」ことです。

普段の生活や周りの人との交わりの中で、自らの「五事を正す」ことが、「良知」を磨き、「良知に致る」大切な道です。



藤樹先生による致良知の額

(2) 仏教を広めた盤珪永琢 (1622~1693)



如法寺仏殿

盤珪永琢、正式には、大法正眼国師 盤珪永琢禅師大和尚といえます。

盤珪は、1622年、播州揖西郡浜田郷（現在の兵庫県姫路市）に生まれました。10歳のときに父を亡くし、代わりに兄が盤珪を育てました。兄は盤珪に立派な大人になってもらいたいと思い、寺や塾へ習い事に行かせます。しかし、兄の思いとは裏腹に、盤珪は子どもたちと近くの揖保川で小石をぶつけ合う石合戦をしたり野山を駆け回ったりと、とても活発に遊びまわっていました。そんな自由奔放な盤珪でしたが、兄にひどく叱られた後は、次第に学問に打ち込むようになります。

ある日、盤珪は「大学」を読んでいる中で、「明德」という言葉に目を留めました。その意味を先生や目上の人に尋ねますが、明確な答えが得られません。盤珪が17歳のとき、赤穂（現在の兵庫県赤穂市）の随鷗寺の雲甫和尚のもとに弟子入りますが、やはり「明德」の意味については、盤珪の納得のいく答えは得られませんでした。

そこで、盤珪は仏の心を知ろうと厳しい修行に取り組みます。あるときは、あまりに座禅を続

如法寺
みびころチエック

1992

(平成4)年、国の重要文化財に指定された如法寺の仏殿。

1669年

の創建当時の形態を守りながら保存修復が行われ、2015(平成27)年11月21日に竣工式が行われました。禅堂を兼ねた禅宗様仏殿は全国でも珍しく、大梁を渡した内部の空間構成は大変見ごたえがあります。また、如法寺は大洲藩歴代藩主加藤家にゆかりがあり、13代のうち7藩主の墓所が寺から登った富士山内に点在。さらに長浜の沖浦観音(国指定重要文化財)とも関係があるので、あわせて巡ることをおすすめします。



如法寺山門

如法寺
木之本安正兼務
ご住職



け過ぎて、お尻の皮がむけてしまったり、血のかたまりを吐いてしまったりしたこともありました。

盤珪が26歳のときのことでした。盤珪は、「これまでのような苦しい修行をしなくても、人は生まれながらに迷いや欲がなく、自然豊かな景色を同じように愛する仏の心をもって。」と悟ったのです。その後、盤珪は自分の教えを説いて全国を回りました。

盤珪が大洲と縁をもつようになったのは、大洲藩2代藩主加藤泰興が盤珪の教えに感嘆し、大洲に来るよう強く願ったからでした。その願いに応じ、1656年に盤珪は初めて大洲を訪れます。

そして、1669年、盤珪が48歳のとき、泰興は、**盤珪のために柚木に如法寺を建てました。**

盤珪は、72歳でこの世を去りましたが、その間に盤珪の得度を受けて出家した弟子は400余名、弟子として教えを受けたものは5万人余りいます。また、新しく寺を興すことを禁じられていた当時、廃れていた47の寺を復興するとともに、150の寺を興しました。これらのことから、盤珪は、多くの人々に尊敬され、「生身の釈迦」と仰がれていたのです。

盤珪の教えは、仏心に性別や身分は関係ないというものでしたので、女性や身分差別を受けていた人々に広く受け入れられました。現在も、柚木にある如法寺は、龍門寺（姫路）、光林寺（東京）と並んで盤珪の三大寺として、多くの人々に親しまれています。



盤珪が座禅を組んでいたと言われる座禅石（富士山山頂）

盤珪とハンセン病

盤珪が、長浜町の西隆寺にいたときのこと、ある日、一人のハンセン病（当時は「らい病」と言っていました。）をわずらっている人が、盤珪の下で教えを受け、頭を丸めたいと言ってきました。盤珪は、すぐにかみそりでその儀式を行いました。そのとき、そこに同席していた侍は、病人を気持ち悪がり、頭を丁寧に扱う盤珪に水を持ってきました。そして、盤珪に手を洗うよう勧めたのです。そのとき盤珪は、「この病人よりも、不快そうに嫌うお前の心の方がよっぽど汚いわい。」と言い放ち、持って来た水を使うとはしなかったのです。盤珪の人を差別しない強い姿勢がうかがえる話です。

ぼくも
見習わなきゃ。



(3) 県内初の藩校設立に尽力した川田雄琴 (1683~1760)

川田雄琴は、江戸の出身で、朱子学を学んでいましたが、後に陽明学者の三輪執斎に弟子入りし、有名な弟子の一人となります。雄琴が大洲と縁をもつようになったのは、1732年、三輪執斎の勧めで、5代藩主加藤泰温が**雄琴を陽明学の講師として大洲に招いた**ことがきっかけでした。

雄琴は、藩主や藩士に陽明学の講義を行うだけでなく、藩内を巡回し、庶民にも分かりやすく教えるなど、精力的に教育活動に取り組みました。また、藩内の様子を細かく調査し、多くの人々の善行を記録した「**豫州大洲好人録**」を著しました。さらに重要なことは、大洲藩の藩校にあたる**止善書院明倫堂を創設**したことです。当時は、享保の大飢饉の頃で、大洲でも度重なる洪水による田畑の流出や虫害による凶作、城下町の大火などが続き、藩の財政はとも厳しく、簡単には藩校の建設は実現しませんでした。しかし、雄琴は藩や住民に節制を訴えるとともに、城中や自宅、領内の多くの村落で、時には高度な陽明学の理論から、誰にでも容易に理解できる教訓まで講義をしたので、藩内に自発的に勉学に励む風習ができたのです。

その甲斐あって、雄琴は1747年に、大洲小学校前の現在の観光駐車場になっているところに止善書院明倫堂を作ることができました。明倫堂の創設に当たっては、藩主泰温が基金を積み上げるとともに、藩士や庶民の寄付など、藩民あげての協力があつたので、泰温が1744年に学堂を建設する命令を出すことができました。その翌年、泰温は亡くなりましたが、藩主を引き継いだ泰衛が完成させました。

明倫堂は、伊予8藩の中では最初の藩校で、全国では、28番目に当たります。このことから、大洲藩が教育に熱心であったことがうかがわれます。

雄琴は明倫堂の初代教授を務めました。引退した後は、川田家が4代にわたって陽明学を教えていました。その後も、明倫堂は、明治時代に学制が公布されるまで、大洲藩の教育に重要な

川田雄琴と 止善書院明倫堂



雄琴講演図



明倫堂跡地

役割を果たしました。川田雄琴一家の墓は、大洲市柚木の興禅寺境内裏の山の中腹にあります。

③ 文化・伝承

(1) 豫州大洲好人録

江戸時代の半ばに大洲藩に招かれた川田雄琴は、大洲藩士だけでなく農民や町人などの庶民にも分かりやすく陽明学の教えを広めました。藩内を巡回し、至るところで講演や講義を行い、多くの人に大きな影響を与えました。

雄琴は、巡回のときに聞いた庶民の善行や尊い行いを、「豫州大洲好人録」としてまとめました。ここには、45の話が記されています。この中に、「**成能村農民二十七人同志郷約之事**」という話があります。雄琴の話聞いた成能村（現大洲市成能）の農民たちが、自主的に郷約を作った話です。当時、自然災害による凶作や不作が度々起こり、農民たちが安心して生活できにくい状況があったようです。そのようなときに聞いた雄琴の話が、農民たちの心に深く響いたのです。そして、次のような決まりを作り、守ることを誓約しました。

(全11か条の一部)

- 一 近年農作物が不作で困っているが、これからも思いやりのある誠実な気持ちをもって農業に励むこと



豫州大洲好人録 教示



「豫州大洲好人録」

1737年から45年までの9年間にまとめられました。雄琴の自序や題言、教示などの内容です。この書が印刷されて一般に広まったのは、雄琴の死後40年目の1800年のことでした。

「郷約」

秩序の維持や助け合いを目的とした村の決まりのことです。



成能村農民二十七人同志郷約の地の碑

- 一 法律をよく守り、博打などの非行をしないこと
- 一 隣近所をよく話し合い、協力し助け合って農業をすること
- 一 派手な服装をせず、清潔で質素な身なりをすること
- 一 家族はもちろん、親戚一同とも仲良くすること
- 一 庄屋や村役人、仲間ともけんかや口論をしないこと
- 一 冠婚葬祭やいろいろな会合の経費を節約すること

農民が自主的にこれだけのことをしたことに、雄琴はたいそう驚きました。当時は、農民たちの反抗（百姓一揆）を恐れた藩が、庶民が集会を開いたり団体で行動したりすることを厳しく禁止していました。この郷約をつくる行動は、それに反していましたが、藩はその内容に感じし一切の罰を与えなかったということです。

この他にも、家族のために一生懸命尽くした人、自分の財産を使い果たしてまで困っている人を助けた人、貧しくても誠実に生きた人などの話が記されています。この書が発行された頃は、幕府の「寛政異学の禁」により、朱子学以外の学問を学ぶことは難しい状況にありました。しかし、大洲の地では、このときすでに、中江藤樹から川田雄琴につながる陽明学の知行合一の思想が広く民衆にも及んでいたようです。このような背景があったからこそ、陽明学に徹した雄琴の著述が発行されたと考えられます。

(2) 主馬神伝流

肱川は、流域の人々が日々の糧を得るところであり、交通路であり、大洲城にとっては、自然の堀でもあるのです。その反面、肱川は大洲の中心を分断するため、大洲藩としては、武術

「寛政異学の禁」

1790年に、老中松平定信が寛政の改革で行った学問の統制のことです。朱子学を幕府の正式な学問とし、湯島聖堂の学問所で朱子学以外の講義や研究を禁じました。

民衆も陽明学の教えを受けていたんだね。



大洲ってすごいところ。



の一つとして泳ぎを身に付ける必要がありました。

そこで、初代藩主加藤貞泰は、1617年、重臣である加藤主馬光尚に命じ、**大洲藩の水術を創始**することにしました。主馬が創始した水術は、岡如柳齊吉英によって完成されました。その後は、藩の武芸の司だった蓑島家が受け継ぎ、武芸百般の一つとして肱川で盛んに泳がれていたのです。

泳ぎ方は、体を伏せて泳ぐ平体と立ち泳ぎである立体で扇足を中心にした実用的なものでした。その泳ぎは、藩士が参勤交代の際に、大井川の渡し人足から「伊予の川猿」として恐れられていたほどなのです。

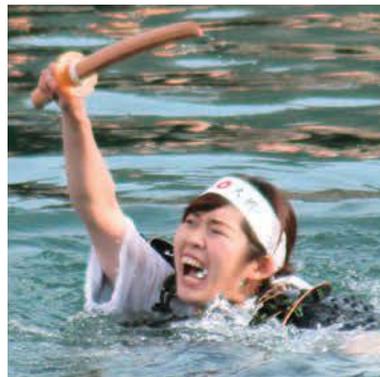
1797年には、蓑島家の高弟である伊藤祐根が、松山藩に水連師役（水泳の先生）として迎えられ、大洲藩の水術を「主馬流」と名付けて、松山藩士への指導を始めました。祐根は、

川泳ぎに向けた平体の「主馬流」を、海泳ぎに向けた平体と横体のある泳ぎに改め「神伝主馬流」と改名しました。実用的で海でも使える大変すばらしい泳ぎだったので、広島藩や津山藩をはじめ諸藩の士が入門し、泳法を身に付け広く使われることになりました。

さらに、祐根の嫡子である伊藤祐雄は、神伝主馬流から横体泳法だけを抜き出して、門弟の津山藩士植原翼龍に伝えました。それが神伝流として、岡山、広島、



芋綿槽下の神伝流発祥の記念碑



毎年、成人の日には、新成人のこれからの活躍を願い、肱川で寒中水泳が行われています。そこで、主馬神伝流の古式泳法が披露されます。

江戸を中心に広く伝わることとなったのです。

明治時代になって、水術の公的な継承は途絶えましたが、肱川での川泳ぎは、大洲の人たちの中で、普段の泳ぎとして引き継がれてきました。大洲でのこの古式泳法は、1957（昭和32）年に神伝流の一つの分派として日本水泳連盟に登録されました。そして、2002（平成14）年に、愛媛県無形文化財に指定され、2013（平成25）年には、日本水泳連盟から**主馬神伝流として一流派に認定**されることになったのです。

「主馬神伝流」の名称は、創始者である加藤主馬の名と、松山の「神伝主馬流」にちなむもので、現在は大洲市のほか松山でも継承されています。

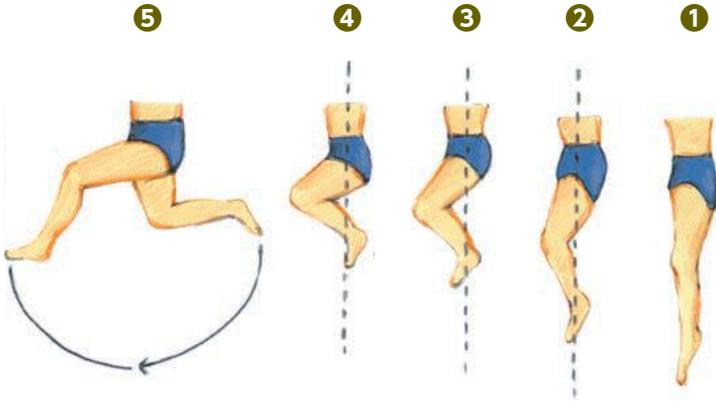
主馬神伝流の泳ぎ方

- 平体…水面に伏した姿勢の泳ぎ
- 横体…片方の肩を下にした横向きの姿勢の泳ぎ
- 立体…立ち泳ぎ

○扇（あおり）足…両足をまっす

ぐに伸ばして揃え、膝を曲げて両足を大きく広げて開き、弧を描きながら水を扇（あお）ってまっすぐ伸ばす。

扇足の動き



ぼくも負けずに練習するぞ！



無形文化財

日本の伝統的な芸能や工芸技術など無形の文化的所産で、歴史上または芸術上価値の高いもの

(3) 大谷文楽

おおたにぶんらく

肱川町大谷地域には、今も大谷文楽が伝承されています。2015（平成27）年現在では10名の座員が所属していて、発表会や公演会の前に集中して稽古をしています。2014（平成26）年3月で閉校になった大谷小学校では、総合的な学習の時間を利用して文楽を学んでいました。現在は、定期公演や肱川中学校などを訪問して発表会を行うことで、児童や生徒たちに伝統をつないでいくとともに、保存活動を進めています。それでは、無形民俗文化財に指定された大谷文楽が、どのように肱川町に伝わったのか見ていきましょう。



肱川中学校での文楽公演

1853年、黒船が来航した慌ただしい年に、大谷地区に吉田伝次郎率いる淡路の人形芝居が巡業してきました。ところが、巡業中に江戸幕府の12代将軍徳川家慶が亡くなってしまったので、その喪に服すために歌舞音曲が停止されました。そのため、一座の座員はそれぞれ故郷に帰っていきました。しかし、5人の座員は、大谷にとどまり、村の青年に人形を操る技術を伝授しました。その後、素人と玄人が合同で初めて文楽を演じたところ、大変な好評を博しました。これを契機に、1856年には、大谷の知者ノ木に移住していた徳島出身の数名を徳島へ派遣し、人形や衣装、その他の諸道具を買い入れるなどして、こつこつと文楽に必要な道具を充実させ

有形民俗文化財

衣食住、生業、信仰、年中行事などに関する風俗習慣、民俗芸能、民俗技術などの無形の民族文化財に用いられる衣服、器具、家屋その他の有形で価値の高いもの

無形民俗文化財

演劇・音楽・工芸技術その他の無形の文化的所産で歴史上または芸術上価値の高いもの

地域の人たちによって
伝承されています。



ていったのです。そして、農閑期を利用して文楽を上演し、人々を楽しませていました。

それ以降、**大谷地区の人々に継承されて**、地区に文楽が根付いて今日に至っています。

しかし、第二次世界大戦中には、大谷文楽に関わる大きな事件もありました。

1942、1943（昭和17、18）年頃、破損しつつある人形の頭を新品と交換するという甘い誘いに乗せられて、名品だった人形の頭を手放してしまったのです。その後、専門家に鑑定をしてもらったところ、残った頭の中には国宝級の頭もあることが分かりました。残念ながら、散逸した頭などは戻ってきていませんが、残った貴重な頭は、新たに調達した頭などとともに、大切に使われています。

文楽は、浄瑠璃・三味線・人形が三位一体となって、日本人の心を描く総合舞台芸術です。その文楽への認識が、徐々に浸透していき、1964（昭和39）年に愛媛県無形民俗文化財に指定されました。大谷文楽の出し物は「絵本太功記十段目尼が崎の段」「三国伝来玉藻前旭 袂道春館の段」などの9つが準備されています。

(4) 河辺鎮縄神楽 (山鳥坂鎮縄神楽)

毎年、8月13日に、肱川町の旧岩谷小学校跡地では、夜神楽が行われ、大勢のお客さんの熱気に包まれます。これは、肱川町岩谷地区で守り続けられている「河辺鎮縄神楽」です。

この神楽の由来は、1522年にさかのぼります。和氣出雲守が、現在の大洲市肱川町と河辺町の境に、松の窪城を築城しました。その後、日向国（宮崎県高千穂）へ行ったおり、岩戸神楽を見て感動し、自らその技術を習い、地元へ帰り、神主を集めて創始したと言い伝えられています。そして、その後江戸時代にもずっと地域の人によって受け継がれてきました。

演目は、16座から構成されています。その中の一つ、岩戸開きの舞は、天照大神が、弟の素戔嗚尊の乱暴を怒り、天の岩戸（洞窟）へ籠もられたため、世の中が暗闇になったことから始



大谷文楽



人形の頭



「大蛇退治の舞」で八岐大蛇と戦う素戔鳴尊

まります。そして、それに困った神々が協議し、岩戸の前で笛や太鼓、鈴を鳴らして舞い、天照大神に再び世の中を明るく照らしていただくとする内容のものです。その他にも、「日本武尊やまとたけるのみことの舞」や「恵比寿えびすの舞」などがありますが、特に「大蛇退治の舞」での、大蛇の仕草と素戔鳴尊との格闘の場面は迫力満点です。

河辺鎮縄神楽は、1998（平成10）年、ロンドンで行われた世界旅行見本市で公演し、大成功を収めています。舞台となったロンドンのステージで伝統の演技、「大蛇退治の舞」を披露し、盛大な拍手を受けました。ロンドン大学のデービット博士は、「今回の親善公演は、大学始まって以来の人気であった。なぜならば、日本の伝統芸能を直接鑑賞し理解するだけでなく、会場内外での交流など、演技を通じて心と心が響き合ったからだ。」と絶賛の言葉を贈っています。

この河辺鎮縄神楽は、1970（昭和45）年に愛媛県の無形文化財に指定され、1977（昭和52）年に無形民俗文化財に指定替えされています。



河辺鎮縄神楽



ぼくも大好き！

毎年大勢の人が夜神楽を楽しみにしているよ。

(5) 藤縄神楽

大洲市北東部を流れる矢落川上流域に位置する柳沢地区では、「春はお神楽から始まる」と言われ、2月から5月にかけての多くの春祭りで藤縄神楽が演じられています。この藤縄神楽は、神社拝殿等で厄除けを祈願して奉納される神事ですが、地域の人々は「春神楽」と呼び、神楽場の周りで酒食をしながら見物して楽しむ春の風物詩として親しまれています。

1845（弘化2）年栗田家文書「御神楽式」によると、この神楽の起源は、藤縄・柳沢・田処・喜多山・恋木などの矢落川上流域の各村の神職たちによって演じられていたものと考えられます。これが、地域の神楽師に受け継がれ、現在は「藤縄神楽保存会」によって守り継がれています。

観衆との戯れや曲芸などの見せ場が多いのが藤縄神楽の特徴ですが、特に「悪魔あくま払鬼はらひおに四天」という演目は、観衆が舞いに参加したり「ダイバ」と呼ばれる鬼役の神楽師が客席に入って観衆と掛け合ったりして人気があります。

藤縄神楽を構成する全18演目の全てを演じると、約5時間を要しますが、神楽師の舞いは、全ての歩数や歩幅が定められているなど非常に厳粛です。しかし、舞いに花を添えるはやし囃子の太鼓に関しては、神楽師の舞いに合わせて自由に演奏をするという特徴があります。

言い伝えによると、かつて道後温泉の湯が出なくなったときに、太鼓の名人であった藤縄三嶋神社の神主が神楽を奉納し、太鼓を「デンデン」と打ったそうです。それでも湯が出ないので「ドンドン、デルデル」と打ったところ、その音に応じるように湯が湧き出して人々を驚かせたという話が残っています。

この藤縄神楽は2010（平成22）年に愛媛県の無形民俗文化財に指定されています。





ダイバの舞



藤縄神楽



4 産業

江戸時代の村人の生活は、自給自足に近いものでした。また、幕府は安定して年貢を取るために、米以外の作物の栽培を制限していました。

ところが、江戸時代中期以降は、国内における商品経済が発展し、あちらこちらで、価値のある商品を作り始めることになりました。その結果、都市で手工業が発展するとともに、農村ではその原料となる商品作物の栽培が広がったのです。また、村人が作物を自分で製品に加工して問屋に売る家内工業も発達しました。当時の特産品としては、灘なだの酒（兵庫県）や瀬戸内海の塩、有田の磁器（佐賀県）、輪島の漆器（石川県）、南部の鋳物（岩手県）、越前の紙（福井県）などが有名です。

この時代、大洲でも同じように特産品が作られました。ここでは、その中から「大洲和紙」「木蠟もくろう」「砥部焼」について見ていきます。

（1）天下に独歩する大洲の和紙

大洲の和紙は、平安時代に書かれた「延喜式えんぎしき」に存在が記されているほど古い歴史があります。原料のコウゾ（楮）は、昔から山間部に自生していましたし、紙すきに必要なきれいな水は、豊富でしたので、冬の仕事として行われていたと考えられます。

それが、江戸時代の後期になると、突如、「大洲半紙」としてその質の高さが有名になります。このことは、幕末の経済学者である佐藤信淵さとうのぶひらが著書の中で「今の世の中で、伊予の大洲半紙は厚くて幅も広く、天下に独歩する勢いである」と絶賛していることから分かります。

この大洲和紙の発展には、2人の先駆者の存在がありました。一人は、岡崎治郎左衛門おかさき じろうざ えもんであり、もう一人は、宗昌しゅうしょう ぜんじょうもん禅定門です。

その他の特産品

「伊予生糸」

大洲藩11代藩主加藤泰幹かとう やすもとは、養蚕業の先進地とされてきた甲斐国かゐのくに（山梨県）へ家臣を遣わし、養蚕の巧者数名を雇い入れ、桑の苗数千本を持ち帰らせました。それが功を奏し、その後、大洲の養蚕業は大きく振興し、明治時代になると大洲の中心的な産業となっていくきます。

その他、伊予郡本宮村（伊予市）で塩田の開発も行われました。

国の伝統的工芸品に指定された大洲和紙

1977（昭和52）年に国の伝統的工芸品に指定され、障子紙は、皇室の御用邸などにも使用されています。



五十崎の和紙（内子町提供）

大洲藩2代藩主加藤泰興は、当時（寛永年間）紙すきが衰退していることを残念に思い、紙すきの技術をもった一族である土佐の浪人岡崎治郎左衛門を召し抱えました。治郎左衛門は、大洲藩の保護を受け、紙すきの作業所を整えました。そして、技術の子孫に伝え、以後代々、藩の御用紙をすくようになりました。

それとは別に、村人に紙すきの技術を伝授したのは、越前（福井県）の紙すき師である宗昌禅定門でした。宗昌禅定門は元禄年間（1688〜1703）、大洲領の平岡村（現内子町）に住み着き、紙すき師として大洲和紙の改良に一生をささげます。

このように、土佐紙と越前紙の紙すきの高度な技術が導入された大洲和紙は、その後、大いに隆盛を極めます。

大洲藩は、コウゾの苗を土佐から購入し、商品作物としてコウゾ栽培を広げました。また、生産された和紙を大洲の特産品として紙問屋や仲買者に買い上げさせて製紙業を奨励していきます。製紙業の発展は、庄屋や豪商、商人に大きな利益をもたらしました。しかし、そのような状況に反発する村人たちもいました。

そこで、藩は、商人の座を廃止して、和紙やコウゾを藩の専売制としました。これまでの民間の取引を停止させ、藩の船で和紙をすべて大坂蔵屋敷に納入することにしたのです。また、

品質が高かった 大洲半紙

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれた江戸の商人は、大洲半紙を商業用帳簿（大福帳）として使っていました。火事の時には焼失を逃れるために、それを井戸に投げ入れていましたが、数日後に井戸から取り出しても、原形を失わず、墨で書かれた文字も鮮やかなままでした。また、大阪でも、大塩平八郎の乱で火災が発生したときに同じようなことがあり、大洲半紙の評判はよかったです。

大洲紙騒動

1816年城下近くの村の庄屋たちが中心となり、藩の専売制にからむ、下級役人の苛酷な取り締まりや商人たちの癒着などの不正を糾弾しようとしたものです。反乱は未遂に終わり、首謀者は処刑されました。

藩の買い上げとするために、領内に楮役所こうやくと紙役所を設置しました。宝暦年間（1751～1764）には、大洲藩の収入の8割を、和紙が占めていたとも言われています。これが大洲紙騒動と言われるものです。

明治時代になると、藩による統制が解けたため、紙の品質が低下しましたが、ミツマタ（三楮）を原料とする改良半紙に着手し、再び和紙作りが盛んになっていきます。

（2）大洲藩が奨励した

内子の木蠟

電灯やガス灯のないこの時代、夜を過ごすためには、菜種油とろうそくが必需品でした。ろうそくは、ハゼ（燼）の実から油を搾った木蠟から作られます。

大洲藩内の木蠟づくりは、五十崎村の豪商綿屋わたやが、安芸国あきのくに（広島県）から蠟打人ろううちを雇ったことに始まるとされています。大洲藩は、九州や広島からハゼの苗木を取り寄せ、栽培を奨励しました。また、蠟打ろううちや蠟晒ろうざし、ろうそくづくりの技術も伝えられ、綿屋は大洲藩に蠟や木蠟から作られる鬢付油びんづけあぶらを献上して木蠟販売を認めてもらいました。この木蠟づくりは、内ノ子村（現在の内子町）や新谷藩にも伝わりました。しかし、生の蠟を、鉋かんで削り

伊予式箱晒法

芳我弥三右衛門が、ある夜、廁かまどに行った際、手にしていたろうそくから溶けた蠟が手水鉢に落ち、小さな結晶になるのを見て考案したと伝えられています。芳我家の白蠟は、パリの博覧会に出品して表彰されるなど世界的な評価を獲得し、輸出を大幅に伸ばしました。

ろうそくは当時必需品だったんだ。

ぼく暗い嫌い。



天日で晒して作る白蠟は、不純物をうまく取り除くことができず、品質がよいものではありませんでした。

しかし、幕末から明治にかけて、芳我弥三右衛門が、生の蠟を溶かし、冷水に注いでできる蠟花を天日に晒す「伊予式箱晒法」を考案することにより、良質の白蠟が生産され、芳我家は日本一の製蠟業者となっていきました。

(3) 大洲藩の特産品だった砥部焼

「砥部焼」は砥部町の特産品です。ところが、江戸時代の資料を見ると大洲藩の特産品として記されています。これは、江戸時代の砥部町は大洲藩だったことが理由なのです。先にも触れた大洲藩と松山藩との間で替え地が行われた砥部は、焼きものに適した陶石（安山岩）が産出し、周りの山からは、燃料となる赤松が大量に採れました。そのため、この地は古くから陶器の産地でもありました。

江戸中期の1775年、大洲藩9代藩主加藤泰候は、特産の砥石の屑を利用した白磁（磁器）の開発を杉野丈助に命じます。丈助は、登窯を作るとともに、肥前（佐賀県）から陶工を招き、磁器づくりを始めました。何度も失敗を繰り返返



砥部焼

砥部焼も大洲藩の特産品なのね。



登窯



砥部焼絵付け（大洲北中学校）

しながらも、1777年、ついに磁器づくりに成功します。

その後、新たな原料「川登石」を発見したり、レンガを使った窯や陶石を砕くための動力として水車を作ったりして、技術を向上させ発展することになります。

磁器の焼成に成功した大洲藩は、窯の運営は民間に任せ、開窯や焼成、出荷に税を課しました。窯場は城下から遠いため、郡中（伊予市）の代官所に管理させ、郡中から問屋を通じて出荷させたので、砥部焼は、松山をはじめ、遠く大阪方面にまで流通するようになりました。

小学校の社会科では、副読本の「愛媛のくらし」などを使い、愛媛県の代表的な伝統工芸品である「五十崎の和紙」や「内子のろうそく」「砥部の砥部焼」について学習しました。これらは、現在、大洲市の特産品ではありませんが、これらの伝統工芸が生まれるきっかけとなったのは、大洲藩の政策でした。また、大洲藩が、奨励や保護、品質改良に努めたことが、これらの工芸品が現在まで大切に受け継がれてきた大きな要因なのです。



砥石山（砥部町外山）

平安時代から、砥石を採掘しており、藩政時代には大洲藩の直営事業として採掘され、砥部焼の原料としていました。

